FUJINO STEINER
# COLUMN

コラム アーカイブ　ニュースレター登録

## 塚本 亜里菜 さん　*Alina Tsukamoto*

早稲田大学国際教養学部に在籍し、オランダのライデン大学に留学中の塚本亜里菜さん。学生として学びながら伝統工芸材料の新たな可能性を探求していくアップサイクル製品ブランド「sAto」を立ち上げるなど、独自の活動をされています。日本とイギリスにルーツを持ち、小学校から藤野のシュタイナー学園で12年間学んだ塚本さん。シュタイナー教育を受けるなかで感じたこと、得たことをお話ししていただきました。

※2022年2月の取材時の内容です。

留学先のオランダ、アムステルダムの街角で

**▼学校生活はどうでしたか？**

学校という初めての環境で最初は緊張していたのを覚えていますが、徐々に楽しいと思うようになりました。クラスは24人でした。学校に行くと新しいことを知ることができる。知らないことを教えてもらうことはとても楽しかったです。

**▼とくに印象に残っている学びはありますか？**

ひとつのテーマを集中して学べる『エポック授業』がいつも楽しみでした。いろいろな国の神話を先生が話してくれるのを夢中で聴いていたのを覚えています。あとは古賀先生の音楽の授業です。クラスメイト全員がゴングなどの響きのある楽器を持ってその場で音を作りあげる授業がありました。即興で演奏し、互いの音を聴き合いながら、みんなでその音楽の終わりを見つける。お互いの音を聴きながら、音を作りあげて、終わりを見つけていく過程がとても楽しかったのを覚えています。

**▼高学年になってくるとシュタイナー教育や学校への反発が生まれることもあると聞きましたが？**

私たちのクラスは途中で担任の先生が替わったこともあり、7～8年生のころは先生方には申し訳ないくらい反発した時期がありました。先生の話をちゃんと聴こうとしなかったり、言われたことに納得がいかなくて何度も先生方と話しあったこともありました。初・中等部最後の集大成である8年劇もどうなることか…と思ったときもあったのですが、「やるときはやる」という感じで最終的には形になりました。形になるよう先生が導いてくださったのだと思いますし、劇に取り組むことや、学ぶこと自体はやっぱりずっと楽しかったんです。

**▼高等部に上がるときに外部の学校に行くことは考えなかったのですか？**

いわゆる高校生らしい「部活」をやってみたいな、と心に浮かんだりもしたのですが、やっぱりシュタイナー学園での日々が楽しかったし、高等部の学びを自分もしたい、という気持ちがありました。ですから大きな迷いはありませんでしたが高等部に上がって10年生になったころ、自分の置かれている環境に違和感を覚えました。藤野や学園というとても狭く、守られた環境が窮屈に感じ、外に出てもっと広い世界を見たいと思うようになりました。そこで自分で世界中のシュタイナー学校にメールを出し、交換留学先を探しました。そして11年生のときにオーストラリアのシュタイナー学校に留学しました。

**▼オーストラリアに行かれて、どうでしたか？**

とても楽しかったのですが「こんな世界があるんだ」という衝撃を受けました（笑）。同じシュタイナー教育の学校ではありますが、日本や藤野とは違う部分も多くありましたし、同じ歳でもこんなにも違うんだ、と文化や考え方の違いを身をもって感じることができました。それはすごく新鮮な体験で、自分のいた環境を客観的に見ることができました。その中で、自分がいた環境の良い部分が見えたり、ずっと続けてきたお囃子の伝統文化としての魅力に気づく機会にもなったと思います。留学をきっかけに、日本でどんどん失われている伝統文化の継承に関心を持ち、12年生の卒業プロジェクトのテーマに『祭囃子の継承～人と地域の繋がり～』を選ぶきっかけにもなりました。

**▼12年生は集大成のさまざまな課題や発表があり、とても忙しそうですが、大学受験もされたんですよね。**

はい。学ぶことはずっと楽しかったので、自然と大学に進学することを決めました。たくさんのことに興味があり、なかなか絞ることができませんでしたが、英語で授業が行われることと、留学に行ける大学に行きたいと思っていました。そこで幅広い分野の学びができ、英語で授業が行われ、1年間の留学が必須になっている早稲田大学の国際教養学部への進学を考えました。シュタイナー学園の12年生は、卒業演劇、卒業プロジェクト、卒業オイリュトミー公演もあり、力を入れて取り組む課題が続きます。それらと並行して受験の準備をするのは…本当に大変でした（笑）。大変ではあったのですが、それぞれにグッと集中して向き合っていったので、今振り返るととても充実していて「楽しかったな」という思いも湧きます。

**▼希望の大学に進学されましたが、最初はギャップを感じたりもしましたか？**

ずっと「個」として見てもらえること、自分を表現できることが当たり前だったのですが、全然違う環境で育ってきた人たちと出会い、最初はギャップを感じることもたくさんありました。進学校から大学に入ってきてという人が多くて、皆どこか感じ方が似ているな…と感じたり、シュタイナー学園で12年間一緒にいたクラスメイトたちは、同じ環境で同じ教育を受けてきたのに、全員全然違う一人ひとりだったな、と改めて思ったりもしました。講義を聴いてテスト勉強して、レポート書いて…という大学の学びも最初はなんだかつまらないな…と感じてしまったり。でも少しずつ出会いも広がって、いい友人もできて、そのひとりが今「sAto」というブランドを一緒に行っている友人です。京都出身の子なのですが、失われていく伝統工芸に強い興味を持っていて、伝統文化の継承について考え続けていたわたしと思いが重なる部分が多くあったんです。それでいろいろと考えたなかで、西陣織などの織物や伝統的な刺しゅうに使われてきた金糸と廃棄されてしまうヨットの帆を材料に、バッグやアクセサリーなどのアップサイクル製品を作り販売する「sAto」を立ち上げるところに至りました。

廃棄されるヨットの帆を使った「sAto」のバッグ

**▼とてもすてきなブランドであり、活動ですね。**

金糸はもう作れる職人さんが数人しかいない、このままでは失われてしまう伝統工芸のひとつなんです。デザインや製作を通していろいろな人を巻き込みながら、こういったこのままではなくなっていってしまう技術や使われなくなったモノに新たな可能性を見出していけたらと思っています。今、わたしはオランダに留学中なのでオンラインでミーティングなど重ねて新たな商品の開発などを行っています。

**▼早稲田大学国際教養学部は1年間の留学が必須とのお話でしたね。**

今はオランダのライデン大学でアーバンスタディーズという都市研究の学問を中心に学んでいます。都市には貧困問題や環境問題、再開発などといったたくさんの問題があります。みんなが住みやすい都市をどうデザインしていくかを考える学問です。大学の授業だけでなく実践的なこともしたいと思い、実際に地域に入っていってコミュニティデザインなどを行っている団体でインターンもしています。大学卒業後は、ヨーロッパの大学院でアーバンスタディーズを学びたいと考えています。「sAto」の取り組みも並行して行いながら、日本の伝統工芸材料はもちろん世界の材料も取り入れて事業を広げていきたいです。将来的には藤野に何か恩返しができたらいいなとも思っています。

**▼最後にシュタイナー教育で得たと思うものがあれば教えてください。**

学ぶことの喜び、ですかね。学びのなかでのワクワクする気持ちは学園の授業を通して得たことだと思います。それが今の自分を築いてくれたし、糧になっていると思います。

【sAto】オンラインショップ　htpps://saaaaato.handcrafted.jp